マイケル招いた飛翔への交錯

マイケル・ジャクソン一周忌追憶秘話

日本学術会議の前会長で、東大名誉教授の黒川清氏が、30年以上封印していたマイケルとの意外な関係を明かした。急逝から1年の、異色の追憶記。その舞台には作家の故・城山三郎も登場する。本来交わるはずのない3人が「人生の分岐点」で交錯した。

「Michael Jackson と私の家族：Encino の生活」。そう題した一文を黒川清氏が自分のブログに掲載したのは、6月27日、マイケルの一周忌を踏まえてのものだった。

マイケルの死後、急遽制作されたドキュメンタリー映画「マイケル・ジャクソン キング・オブ・ポップの素顔」では、その全編にわたって、おびただしい数のファンやパパラッチらが、ともかく危険なくらい熱狂的にマイケルを取り囲んでいる。

それを思うと、黒川氏がプログで綴った、米国で青年マイケルとご近所さんのような間柄だったというのはにわかには信じ難いエピソードである。黒川氏に直接伺うと、ロス郊外の地図を指さしながら、当時を振り返ってくれた。

出会いはスーパー

舞台は、ロサンゼルス西部の丘陵地にある高級住宅街のエンシノ（Encino）。映画でも有名なマルホランド・ドライブの道も通ずるこの閑静な一等地に1977年夏、黒川氏は家を購入して家族で移り住んだ。当時41歳で、名門のカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）医学部内科の正教授に就任する2年前のことだった。妻の圭子さんと当時9歳の長男、5歳の長女との4人暮らしだった。グーグルマップで確認すると、外観は当時のままだ。白い壁に広いエントランス、木造平屋の庭先に高級車が2台……。

グーグルで上空から鳥瞰すると、山を背にしたどんづまり、または袋小路という意味の仏語「Cul de Sac」の家というのがよくわかる。邸宅の条件としてならどんづまりほど、家の価値は高い。が、人生、袋小路にひとたび迷い込んだら、なかなか抜けられないものだ。

この黒川氏の自宅から坂道を下り、ヘイブンハースト・アベニューを北に進んだところにマイケルの家はあった。距離にして約2キロ、車で3、4分。

マイケルの家のすぐ先の交差点の東角には食料品を扱う高級スーパー「ゲルソンズ」がある。

黒川氏がマイケルと初めて会ったのが、このスーパーだった。マイケルが19歳から20歳の頃だった。マイケルは家からわずか100メートルのこのスーパーに、車で乗り付けていた。

ポツリとひとりで

顔を合わせるのは、もっぱら土曜の午後だった。カートを押しながら店内を回るマイケルに、「ハイ、マイク……」と声をかけると、マイケルも「ハ～イ」と、気軽に挨拶を返してきた。いつのまにかご近所同士のような気軽な間柄になっていた。一緒にいた黒川氏の子供たちも喜んでいた。

黒川清氏／1936年生まれ。東大大学院医学系研究科修了（医学博士）、69年渡米、南カリフォルニア大学内科準教授を経て、79年カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）医学部教授。83年に帰国し、89年東大医学部教授、96年東海大学教授、医学部長。日本学術会議会長、内閣特別顧問などを歴任した。現在は政策研究大学院大学教授

photo　gettyimages（上）　増渕洋太郎（下）

一周忌でファンが詰め掛けたエンシノのマイケルの家。両親が購入した初めての家で、マイケルは82年に母キャサリンへの贈り物としてこの邸宅を改装した。マイケル自身は88年に「ネバーランド」の大邸宅に引っ越した。

だが、マイケルは、いつもひとりだった。警護のSPもなし、付き人もいない。店内の客たちは笑顔を交わす程度で、普通に買い物をし、マナーとして特別に騒いだりもしない。

黒川氏にしてみれば、大勢の仲間の輪の中にいる自分の大学の教え子らと、ポツリとひとりさびし気なマイケルを比べてはいけないと思いつつも、マイケルの表情に生気が感じられないのが気になっていたという。

「気の毒なくらい消え入りそうな声で、遠慮がちに受け答えしていた。ジャクソン5という名で、物心ついた頃からずっとステージで歌って踊る日常でしょう。まともに学校には行っていないのではないか」

「小さい頃は、お父さんが手を上げたこともあったらしいし、ベガスのショーは嫌がっていたようだ。当時の社会の黒人への根強い差別で気持ちがゆらいでいたとも聞く。若者ならもっと自由な選択肢があってもよかったかもしれない。そう思うと、なんだか可哀想でね。自宅に食事でも招待して、悩みを聞いてあげればよかったかもしれない。悔やまれますね」

自分は「特異」な人間か

当時、マイケルは気胸で緊急入院したり、専属のレコード会社モータウンからの移籍をめぐるゴタゴタも不本意だったらしい。快活なマイケルが、にわかに内気になってしまった、という風評がたったのはこの時期だ。

「僕は同世代の人とは違った人生を歩んでいる」

「人々は自分を特異な人間として見ているし、近所の人のように接してこない。現実の世の中と付き合っていくのは困難だし、その必要もない」

『マイケル・ジャクソン全記録 1958-2009』によると、この頃、雑誌やテレビのインタビューでこんな発言をしている。

時代は、ベトナム戦争終結（1975年）の直後で、しばらく全米に滅失感が漂っていた、と黒川氏。マイケルが外に目を向け始め、自分と他人を見比べて自らの目指す方向を考えあぐねていたのではないか、という。そしてそこに進むべき答えを提示したのは、たぶんクインシー・ジョーンズという大物プロデューサーであり、79年の彼との運命的な出会いがエポックになったとみる。

一方、黒川氏といえば、曽祖父の代から医者の家系で、父は東京帝大卒業後、東大の内科や軍医にも従事。自身も東大医学部卒、東大医学部助手と華麗なる系譜を継ぐ。

しかし、東大でのキャリアを捨て、あえて武者修行に。渡米して8年、エンシノに移り住んだ年は、正念場だった。

その数年後、黒川邸を訪ねて来たのが作家の城山三郎だった。

77年ごろのジャクソン5とマイケル（左）。その2年後、大物プロデューサー、クインシー・ジョーンズを迎えて制作されたショートフィルムやヒット曲は、いまだに健在。「Off The Wall」は全世界での売り上げが2000万枚に達し、それまでのミュージックビデオ作品の概念を一変させた。

城山の目的は、米国で奮闘する日本人の取材。黒川氏のことは、後に出たその著書『アメリカ生きがいの旅』（文春文庫）で、紹介した。多数の人が日本から渡米するが一流大学で正教授になっている例は数えるほどしかない、と述べ、黒川氏は専門医として、腎臓の機能と代謝に関する論文を次々と書き、一流の科学雑誌「ネイチャー」にも掲載されるようになった、と続ける。

「落選おめでとう」

ある時、母校の東大から推され第一内科の教授選の話が舞い込んで、日本への帰国の望みがでてきた。UCLA教授という実績があって最終候補3人の1人に選ばれるが、残念ながら落選、東大教授としての帰国が閉ざされてしまった――。

この場面で、城山の文筆は冴えを見せる。

〈最終的には選に漏れたが、その直後、UCLAの医学部長が親書を送ってきた。

「落選おめでとう。あなたがUCLAにとどまることになって、われわれは心よりよろこんでいる」と――。〉

実は城山自身も、この取材の旅に出た81～82年といえば、あんまり調子がよくなかった。力作『男子の本懐』を上梓したあと、睡眠薬を服用する日常だった。当時の〝城山メモ〟の一節にこうある。〈重い仕事『落日』や『本懐』などのような仕事を二度とやる気力も意欲もない。楽しく書きたい、と思う〉

米国への旅は、彼にとっても「袋小路」から脱出する処方となったのだろう、その後、再び旺盛な文筆活動を再開する。

これも、偶然に過ぎないのだろうか。

DND研究所代表　出口俊一

photo　WireImage／gettyimages